

● 翻訳

# スパイダーは母親のクローンなのか？

ジュヌヴィエーヴ・モレル

(福田大輔 解説・訳)

## キーワード

---

デヴィッド・クローネンバーグ

(David Cronenberg, né 1943; b.1943)

『スパイダー / 少年は蜘蛛にキスをする』 (*Spider*)

映画 (cinéma; cinema)

精神病 (psychose; psychosis)

妄想 (délire; delusion)

幻覚 (hallucination; hallucination)

分身 (double; double)

鏡像段階 (stade du miroir; mirror stage)

父 - の - 名 (Nom - du - Père; Name of The Father)

Geneviève Morel, « *Spider*, clone de la mère ? »,  
*traduit du japonais compte rendu*  
*par DAISUKE FUKUDA*



クローネンバーグが<sup>フライ</sup>蠅に<sup>スパイダー</sup>続いて蜘蛛を撮影した！『スパイダー』は精神病院から移送されてきた男の物語である<sup>1)</sup>。ロンドンの精神病院（それはブロードモアのようなヴィクトリア朝様式の監獄と同じ構造をしている）から中間施設に移送されて社会復帰を準備する男性患者のストーリーである。この中間施設はウィルキンソン夫人によって仕切られている。そこでは患者たちの内面はもちろん、身体で触れてほしくないところも無遠慮に触られる。冒頭の場面にあるように、スパイダーは服を脱がされて風呂にいれられ、ほかの患者たちの前で何枚もシャツを着ている様子をからかわれている。また、患者が割れたガラスの破片で医師を攻撃しようとして、看護師たちにマットレスで押さえつけられた場面があり、そこから「中間施設に入る前」スパイダーは精神病院で生活していたことがわかる。

『スパイダー』とはそれゆえ映画の主人公である。ラルフ・フィネンスが素晴らしい演技をみせている。彼はカトリーヌ・バイレとともにパトリック・マグラアの原作本を読んで、スパイダーの役を演じたいと願い出て、映画制作のイニシアティブをとって複数の映画監督と連絡をとり、デヴィッド・クローネンバーグがそのオファーを受け入れたのである。

### たったひとりで

スパイダーという主人公の強烈さは、ロンドン駅到着の場面でいきなり示される。乗客たちはこれからすべきことを考え、群れをなして急ぎ足でホームを立ち去るが、それとは対照的に、孤独で弱々しいスパイダーはゆっくり下車してくる。住所不定者の出で立ちで、貴重品はすべて身につけ、なかでも一番貴重なものはズボンの股に隠した靴下のなかに入れていた。この場面はリュミエール兄弟の最初の映画（『ラ・シオタ駅への列車の到着』）を思い起こさせるが、こうした幕開けはほかのアメリカ映画でも使われている。運の悪い殺し屋の悲哀を描いたアレン・バロン監督の『Baby Boy Frankie』では、主人公がニューヨークという大都市にひとりで到着する場面で作

---

1) 『スパイダー / 少年は蜘蛛にキスをする』、2002年、フランス・カナダ・イギリス合作、デヴィッド・クローネンバーグ監督、レイフ・ファインズ、ミランダ・リチャードソン、ガブリエル・バーン他出演、パトリック・マグラア原作。

品の幕が明ける。

映画のラストシーンでは、スパイダーが映画全体を通して自分の過去の出来事を再構成したあと、医師によって付き添われ自動車で精神病院に送り返される。スパイダーが座っている場所にちょうど重なり合うように子供の頃のスパイダーが座っている。子供のスパイダーが入院したとき自動車で運ばれたときと同じである。

スパイダーが想起した過去の出来事は、彼の歪められた世界観のプリズムを通して語られる。この主人公は何も語らないが、彼にとって謎をなす事柄を再想起しようとする。観客は彼の眼を通して見るのであり、ゆえに観客は戸惑うこともありうる。その意味では、この映画は非常に象徴的なものである。スパイダーはパズルの名人である。施設で非常に大きなパズルをやっているが、ある重要な瞬間に放り出してしまう。この瞬間についてはまたあとで触れることになろう。彼は自分の手帳に楔形文字に似た判読不可能な文字を書き込んでいる。過去の想起の作業はスパイダーにしか読み取れないメモ書きの作業と交互になされる。同様に、奇妙で聴き取れない言葉を発して、観客はそこに「ママ」という呼びかけや路地の名前くらいしか聴き取ることができない。その言葉のなかには、彼が幼少期に過ごした通りの名前も含まれていて、スパイダーはそこを再訪することになろう。また、母親が語っていたように、彼は手先が器用で、蜘蛛の巣に似た糸製の事物を集めていた。

こうして、この映画の本質的な三つの象徴が現れる。パズル（解決すべき謎）、手帳（再び見出された記憶、書き残すべきそして新たに書き記すべき歴史）、蜘蛛の巣（罫）である。ほかの特徴はもっと表現に満ちている。映画冒頭部分では、染みのある空虚な壁がロールシャッハテストを彷彿とさせる。英語の歌曲が女性によって歌われ、閉じられた窓と街の壁が映し出される。この虚無はスパイダーの人影のない記憶を表しているのであろう。これはトラウマに由来する忘却なのだろうか、それとも気質的欠陥に由来する記憶喪失を伴う狂気なのだろうか。観客の頭には問いが浮かぶが、しかし他にも「すぐには言葉にならない」疑問は残る。人影のないロンドンの通りは日曜日の街頭もしくは、フロイトが夢について語った「もうひとつの舞台」をイメージさせ、観客はスパイダーの無意識の舞台に移行したかのようである。この場面により強調されるのは、ロンドン駅到着の場面のように、他者と交流のない主人公の孤独である（中間施設の患者テレンス氏と軽く言葉を交わす以外にはスパイダーは言葉を発することがない）。

## 母の名

蜘蛛を意味するスパイダーという綽名はどこからきているのだろうか？主人公はデ

ニス・クレイグという名前である。ウィルキンソン夫人はクレイグさんと呼びかけ、父親はデニスと呼んでいたからである。母親だけがスパイダーと情のこもった調子で二、三度呼びかけ、また一度はビッグ・スパイダーと呼んでいる。映画のタイトルは単に綽名ではなく、言語学者が「確定記述」と呼ぶものである。つまり、ソクラテスを指すために「プラトンの師匠」という用語を用いたり、「鼠男」もしくは「狼男」でもってフロイトの患者を指示する「確定記述」である。このふたつの動物がふたりにとって強迫症の対象であったことを鑑みれば、『スパイダー』の主人公は「蜘蛛男」と名づけるべきかもしれない。

過去の想起の最初の場面（DVDのチャプター6）ですでに、スパイダー少年が母親といっしょに綾取りをして遊んでいるのが見られ、母親も息子の手が器用で頭が良いと言っている。少年の方は熱のこもった調子で「これは母さんのためだよ」と返答している。そして、パプの場面のあと（母親が父親と一緒に外出する直前の場面）、スパイダーが母親の髪をやさしく梳かしているときに、母親は「昔、私が若かった頃…」とまるでおとぎ話をするかのように語り始める。彼女は樹木のなかに張られたモスリンの雲を見たような気がしたと語ると、スパイダー少年は母親の話を遮って、「蜘蛛の巣（Spiderwebs）」と言葉をはさむ。背後に潜む大人のスパイダー、次いで母親が、この言葉を歓喜とともに繰り返す。まるで呪文のように。このときスパイダーという名前が、あたかも彼を洗礼するかのように、主人公自身によって発せられるのである。母親は若い頃エセックスに住んでいたことを思い出しながら、この蜘蛛の物語をもっとくわしく説明する。「もっと近くに寄ってみると [モスリンではなく蜘蛛の卵があり]」、蜘蛛は子供たちに餌を与えるために巣を張り、卵を生んだあと「痩せ細って空っぽになって」死へと旅立つことがわかる。この物語は幾重にも重ねられた象徴からなる。また、この物語は息子を命名して象徴的に母親に結びつける。というのも、この綽名は母親から、スパイダーの父親と結婚する前の母親の存在からきているからである。スパイダーとは母親の旧姓であり、この名前は母親からしか到来しないものである（これは父-の-名と反対である）。さらに、このおとぎ話はスパイダーの母親の人格の曖昧性の寓話となっている。一見すると、母蜘蛛は意地悪であると思われるが——ちょうどイヴォンスがそうであるように——、実際のところは子供のために自らを犠牲にする良い母親である。母蜘蛛は子供を産んだと同時に「痩せ細って空っぽになって」死なねばならない。それゆえ、[この物語が意味するのは] 絶対的母親は女ではなく、男性を必要としない母親であるということだ…さらに言えば、この物語は息子を人殺しの母蜘蛛の場所に据えている。スパイダーは巣を張って死をもたらす蜘蛛男である。最後の象徴として、スパイダーは自分の物語の糸

をぴんと張る存在でもある。

この作品が明らかにしているのは、地理的にそれほど離れていない二つの場所、幼少期に過ごした場所と中間施設を毎日往来することで、スパイダーが過去の想起を進めるプロセスである。スパイダーが幼少期に過ごした場所は三カ所あり、一家の住む家屋（父親は配管工である）、日曜菜園をする畑と小屋であり、近所のドッグアンドベッガーというパブである。そこには娼婦もいるが、日が落ちてから両親はそこに酒を飲みに出かける。

### 過去の想起の様々なコード

すべてはスパイダーの目を通して見られることになる。この映画の情景回顧はコード化されており複数の水準に分けることができる。1) スパイダーが自分を子供として捉えた想起がある。そこでは大人のスパイダーが子供に付き添っている。こうした場面では、現実はその場面を子供として目撃したのであるが、大人のスパイダーの記憶がそれを改竄している。2) 子供のスパイダーの姿が見えないシーンがある。こうした場面は大人のスパイダーによって想像的に再構成されたものである。しかも大人のスパイダーは画面に映っていたりいなかったりする。3) 精神病院に関するもっと最近の想起があり、映画の流れにリズムをつくりだす。そこではスパイダーが田園風景を背にして、ふたりの同僚と一緒に働き土地を耕している（これは母親の埋葬を暗示している）。また精神病院についての回想では、スパイダーが割れた硝子の破片で自殺しようとして諦めた場面が出てくる。ここでもまたクローネンバーグは迷わず多層的な象徴表現に訴えている。スパイダーは蜘蛛の巣のかたちに割れたガラスのパズルの最後の一片を拾い、それを精神病院院長に手渡している。これが意味するのは、スパイダーはパズルの不足、つまり彼自身の血塗られた生涯のなかで欠如した断片を補うために自殺するのを諦めたということである。しかしなにによって諦めたのか？精神病院のエピソードはこの謎を解く鍵をもたらさないが、スパイダーの狂気の側面をしっかりと描出している。また、1950年代から60年代までの狂気の社会治療の実際を紹介しつつ、スパイダーの若い頃にひどく重要な出来事があったことも匂わせている。

### 二人の母親

想起された場面のなかでも（とくに大人と子供のスパイダーが登場する想起場面でも）、一番最初のものが重要である。母親はジャガイモの皮を剥きながら、スパイダーに父親を探しにいかせる。パブでは娼婦が乳房を剥き出しにして、子供のスパイ

ダー（大人のスパイダーとともに）は魅了されかつ嫌悪を抱きながら乳房を眺める。スパイダーはイヴォンヌをのちに母親に置き換えることになるだろう。夕食後、母親はスパイダーと顔を合わせて優しい調子で蜘蛛の物語を語ったあと、酒を飲み、父親と一緒にバブに出かける。嫉妬の表情を浮かべた子供のスパイダーは家に残され、大人のスパイダーは両親を追ってバブに向かう。そこには売春婦のイヴォンヌが卑猥な話を連発している。彼女はブロンドの髪を除けばスパイダーの母親そっくりの姿をしている。大人のスパイダーはこれらすべてを想像して、バブから逃げ出し、そのあとで「イヴォンヌ・ウィルキンソン」と口に出している。これが意味するのは、幼少期に見かけた売春婦と現在住んでいる施設の女主人が重なり合ったということである。精神病院では、スパイダーはイヴォンヌの写真と当時のポルノ雑誌の写真とを心のなかで置き換えていた。スパイダーを「放置した」母親の顔はいたるところに現われてくる。その顔はスパイダーが見捨てられたときから世界のなかを浮遊しているのである。イヴォンヌとウィルキンソン夫人は母親の顔により隠蔽されている。母親はすべての女、〈女〉そのもの *La femme* である。

それに続く場面では子供のスパイダーなしに進行するため、大人のスパイダーが想像したものである。父親がイヴォンヌの家に向かいトイレを修理する。この場面は艶かしく猥褻であり、子供のスパイダーが現われないのも当然といえるような過激なものである。そのあとで、父親とイヴォンヌは橋下で抱き合い、イヴォンヌは手についた精子をこれみよがしに川にふるい落とす。この場面は演出過剰であり、茫然自失としたスパイダーの表情がなければ、笑いを催すものになっている。

すべては観客が大人のスパイダーに同一化するようになっており、最初のうちはどうして娼婦のイヴォンヌが母親の分身になるのかわからない。少年が一人家に残る母親を熱愛していて、感じは悪いが性的欲望に満ちた父親に嫉妬する、という強烈なエディプス図式を思い浮かべるかもしれない。この傾向がさらに強くなるのは、母親が父親を誘惑するために鏡の前でシルクの下着を試しているのを想起する場面である。この過去が想起されたとき、大人のスパイダーは自分の部屋で考え込み、感情が荒ぶってパズルをバラバラに壊してしまう。ガスメーターに恐れをなして、自分の身体から放出されているガスを探し出そうとする。観客はどうしてこうなるのかわからず、なにも理解できない…唯一スパイダーがこれ以上なにも知りたくないということだけはわかるのだが…

### 「母親の二度の殺害」対「二人の母親の殺害」

母親殺害の第一の情景は、子供のスパイダーがひとりで糸遊びをしているあいだ

に、大人のスパイダーが想像したものである。母親は泣きながら夫を野菜農園に探しに行く。そこでイヴォンヌの靴を見つけたあと、性交中のふたりを発見する（ここでもまた場面は非常に滑稽である）。夫は悪魔のような顔をして妻に襲いかかり、野獣のようにスコップを打ちつけて妻を殺害する。たとえこの場面が非現実的にみえたとしても、それでも最初観客はこの場面を信じてしまう。本物の母親は死亡して、母親の代わりにイヴォンヌがグレッグ家に入る。子供のスパイダーも大人のスパイダーも恐れるような眼差しで彼女を見やる。

こうして映画は悲劇的な様相を呈するようになるが、精神病院の割れたガラスの場面が挿入されることでさらに悲劇的色彩が増してゆく。子供のスパイダーは父親をののり、本当の母親であると称する偽の母親を罵倒して、ふたりを殺人者扱いする。すぐ撲ってしまう乱暴な面はあるが、父親ビルは普通の父親として心配気な表情で息子を諭すが無駄である。母親は母親ではなく娼婦だとスパイダーは叫んで憚らない。偽の母親の態度はさらに粗忽になり、ありえないことに夕食に生のウナギを出している。この場面の過剰さはスパイダーの記憶の変形を意味するということが理解できよう。ここからまた急展開していく。アルコールの壺を持ったイヴォンヌは施設のウィルキンソン夫人の場所を取って代わり、スパイダーは彼女に手帳を見つけられることを恐れて自分の手帳を破棄するにいたる。街で拾ってきた紐を使って、スパイダーは施設の自分の部屋に巨大な蜘蛛の巣を張る（子供の頃やったように）。そしてウィルキンソン夫人の鍵を盗み出すのである。鍵を取り戻すとしてスパイダーの身体を露骨に性的なやりかたで触つてくると、スパイダーはウィルキンソン夫人、つまりイヴォンヌの部屋にあがり、持ち物を調べあげる。そしてウィルキンソン夫人の「現実的な」正体を証拠立てるものを見つける。娼婦イヴォンヌのフェイクの豹革コートである。コートとドライバーを盗み出したあと、夜中にウィルキンソン夫人の部屋に忍び込み、彼女を殺害することで母親殺害の仇を取ろうとする。ところがそのとき、ひとつの光景がよみがえり、スパイダーは殺害を思いとどまる。そして、ここに母親の殺害の第二の情景が出てくるのである。

子供のスパイダーが大人のスパイダーと共に再登場する。彼は両親の家に巨大な蜘蛛の巣を張る。ガスコンロの近くではイヴォンヌが酔っぱらって眠り込んでいる。子供のスパイダーは蜘蛛の巣の糸を引っぱり、ガスの元栓を開いて、ガスを空中に撒き散らして悦に入る。父親が咄嗟に子供を助け出しガスの元栓を閉めるが、イヴォンヌはすでに死亡している。父親が彼女を外に連れ出したとき、死人がイヴォンヌではなくスパイダーの「本物の」母親であることに気づく。ふたりの母親が死んだことなのである。「お前は母さんを殺したんだ」と父親は絶望して叫ぶ。フラッシュバック



クが終わると、大人のスパイダーがウィルキンソン夫人のベッドの前でハンマーを構えたまま固まっており、そこに彼女が目を醒ます。ウィルキンソン夫人は「あなたはなにをしているの？」とスパイダーを責め立てる（まるで彼の良心であるかのよう）。スパイダーは子供のスパイダーに伴われて精神病院へと送り戻される。

## 妄想

妄想に捕らわれて子供のスパイダーが母親を殺害したのだと作品は示唆している。スパイダーは母親のことを幻覚で見た別の女性、娼婦イヴォヌスと取り違え、[妄想のなかで] イヴォヌスは父親と共犯で母親を殺害して、家に住み着くようになった。母親の殺害はスパイダーの記憶から廃棄されたため、それが想起されるには新たな幻覚の介入が必要であった。苦しい幻覚を伴った想起をするなかで、年老いたウィルキンソン夫人と永遠に若くて挑発的なイヴォヌスとを取り違え、ウィルキンソン夫人を殺害しようとした。しかし野菜農園で起きた父親による母親殺害は子供のスパイダーの妄想であり、この妄想によって、本物の母親の地位を奪った偽の母親の殺害が引き起こされたのである。

もしくは次のように想像することもできなくはあるまい。現実的な殺人もまたひとつの妄想である、と。そして、この妄想における真理の核は、例えば母親のガス自殺であったか、もしくは事故死であり、狂気に陥った子供は自分がその死の原因であると信じ込み、メランコリーの妄想のなかで自己処罰に及んでいた、というのはどうだろうか？これはあくまでひとつの仮説であり、まだほかにも仮説を立てることはできよう。

しかしながら、この映画の首尾一貫した論理に従えば、スパイダーの過去の想起の最終段階が見えてくるはずである。つまり、妄想の核となるものである。作品のなかに留まるかぎり、この核を再構成することよりも遠くに行くことはできない。ところで、ある妄想が真理といかなる関係を結んでいるかを知ることは非常に難しい。この関係は現実を下地にしてはいるわけではなく、現実はつねに変容させられているからである。フロイトによれば、すべての妄想のなかには「歴史的な真理の核」が存在しており、それは過去に廃棄された幼年期の現実の断片であり、現在の現実の断片が廃棄されるのを契機として回帰してくるものである<sup>2)</sup>。しかし、この過去の真理の回帰もつねに変容を蒙ったかたちでなされる。それゆえ上記で述べたような子供による母親

---

2) フロイト「分析における構築」渡邊俊之訳、『フロイト全集 21』(岩波書店、2011年) 所収、354-355頁。

殺害は、事後的に妄想として再構成され変容されたとも言えるのである。そのメカニズムは〔映画のなかでは〕次のように解釈されうる。現在の現実から廃棄された断片というのは、施設の女主人に対する性的かつ攻撃的欲動に関わる。実際、スパイダーの世界における唯一の女性、ウィルキンソン夫人は、イヴォンヌの顔に似ていて、意味ありげにバストアップされた胸をしていた。

この欲動の廃棄によって生み出された穴を埋めるために、廃棄された断片（幼少期の現実と類比的な断片）が回帰してくる。つまり、娼婦と同一視された母親に対する性的かつ攻撃的な欲動、つまり近親相姦的欲動が回帰してくる。子供のスパイダーは、自分の欲動を受け入れることができず、それを抑圧することもできない。ほかの普通の子供たちは抑圧や分割により、母親を優しく愛して、娼婦と寝ることを幻想する<sup>3)</sup>（たとえ娼婦がうっすらと偽装された母親自身でしかなかったとしてもである）。このように母親を別格扱いすることにより、他の女たちを愛することができる。もちろん、この他の女たちが母親を感じさせない限りにおいてであるが。しかしそれがスパイダーには不可能なのだ。こうした分析は『スパイダー』という作品の素材とうまく合致しているように見える。実際、子供のスパイダーは自分の母親を明らかに愛しており、父親に対して嫉妬の感情を覚えている。非常に平凡極まる情景である。しかし、母親との優しいやりとりの場面で、どうしても性的衝動が生じてしまう。子供のスパイダーはその欲動を母親から切り離そうとする。その証拠に、作品のなかで最初の性的場面、パブで乳房を淫らに露出させる娼婦と出会う場面では、娼婦は（当然のことではあるが）見知らぬ女性だった。しかし、母親がパブに父親と入ってきたとき、また母親が父親と性的に戯れているのを子供のスパイダーが目撃したときから（自宅の中庭で両親が熱烈に抱擁していた）、母親は疑わしい存在となりセックスと売春によって汚染される。しかも、母親と売春婦の置き換えが起こるのは、スパイダーが母親を誘惑するのに失敗した場面の直後であり（蜘蛛の巣が物語られる場面）、売春婦が母親の分身となるのもそのとき以降なのである。抑圧は失敗して妄想が定着する。頭髮の色の違いこそあれ、母親も売春婦も同一人物なのである。そうして、妄想は発展していき、子供のスパイダーは自分の母親を母親として認めなくなる。一貫して母親の死に依拠して妄想が発展していくわけである。ゆえに、父親はどうしてもイヴォンヌと結託して母親を殺害したことになる。最終的に、スパイダーは篡奪者であった偽の母親を殺害するが、その偽の母親は死体になってようやく息子に

---

3) フロイト「性愛生活が誰からも貶められることについて」須藤訓任訳、『フロイト全集12』（岩波書店、2009年）所収。

よって認知され、本物の母親に戻るのである。

スパイダーによってラディカルに廃棄されたものは母親の性であり、この廃棄はあらゆる性的なものに影響を与えるのである。すべての性的場面の卑猥で悪魔的な色調のうちにそれを見て取ることができよう。スパイダーのうちにはエロティズムのほんの僅かなかけらも存在しない。

子供の妄想が父親には違う仕方に関係しているのは興味深い。父親はひとりの人物に留まるが、彼は二面性を持った存在となる。想像力によって再構成された性的場面では悪魔的な男であるが、(子供のスパイダーが現れている)回想場面においては、この父親は息子によって引き裂かれ勢いを失っている。妄想が父親を悪魔のように描き出すのは、父親が母親と性的行為に及ぶときのみである。それゆえ父親は「この作品では」単なる飾りとしてしか現れないと言えよう。

### 母親のクローン

もちろん、この母親の遍在は精神病を疑わせる。この映画でも直接的に名指されていないが統合失調症として記述されていた。より詳しくは、統合失調症の典型的な症状を帯びた虚構の狂気であることがわかる(主体が二人に分割され、自閉症的独白を不明瞭にぶつぶつ呟き、私的言語や自分にしかわからない書記法を用い、社交性が欠如している)。しかし、この映画で描かれているような、絶えず連想することで過去を想起すること——ほとんど精神分析の治療の現場で行なわれるような想起——は、精神病の構造においてはほとんどありえないものである。あたかもスパイダーが糸玉を手繰りながら、時系列にそって自分の過去の中心にたどりつくように見えるが、統合失調症は想起を試みてもラディカルな断絶が現われて、想起作業の越えがたい障害に直面する。たとえ想起が妄想的であっても、思考が完全に引き割かれ、手の打ちようもなく行き止まってしまう。スパイダーのような完璧な想起の手順は、むしろ神経症の作家が統合失調症患者を想像してみたというのが本当のところであろう。

最終的には、この虚構の狂気においては、主人公の運命は母親によって語られた蜘蛛の巣の物語に集約される。この物語は神託のように現れる。ある母親が息子を所有している。母親は捕獲者になることもできるのだが、しかし性的な女にはなったことがないし、これからもそうなることもない。もし、女になるために、「完全な母親」から離れてしまうと、彼女は「娼婦」でしかなくなり、「渴いて空疎なまま」死ななくてはならない。こうした母親の息子は母親のクローンでしかない。彼もまた母親と同じように蜘蛛なのであり、母親を殺すための巣を張るのである。

スパイダーはそれゆえ反英雄的存在である。愛に生きるエディプスでもなければ、

復讐を誓うオレストでもない。オットー・ランクが提唱するような英雄、母親が欲望する勝利者としての息子なのではないとすれば、スパイダーは現代の新たな神話の形象、つまり母親たちのクローンとしての息子を体現する人物像なのであろうか？

この神話はあまりに単純に過ぎよう。しかし映画は非常に美しく、どのイメージの細部も非常に凝ったものに仕上がっている。カフェに張ってあるポスターから主人公と一緒に歩いていくイギリスの田園風景の雰囲気は素晴らしい。どの役を演じてもミランダ・リチャードソンは驚くような顰め面をつくってみせた。父親役はなにも理解できないながらも平静さを保ち、息子を配慮する演技をこなしていた。殺人を犯すときの沈着冷静で揺るぎない確信を子役は見事に演じ切っていた。最後に自分の作品を遙か後ろに置き去りにして、ひたすら殴り書きを続ける天才的なアーティスト、ラルフ・フィエンスのやせ細った顔が印象的に残っている。

## 紹介にあたって

### 1. 著者と論文の初出情報について

ここに訳出した論文の著者 Geneviève Morel 氏は、パリとリールで開業しているラカン派の精神分析家である。すでに彼女のデヴィッド・リンチに関する論文が『青山総合文化政策学』通巻第4号(2012年3月)に訳出・掲載されており、詳しい著者紹介と業績一覧については同号を参照されたい。

この論文は精神分析と映画という連続講演会の枠で発表されたモレル氏の原稿を翻訳したものである。2007年4月、パリ郊外のセヌ＝サン＝ドニ県モントルイユにあるメリエス映画館で『スパイダー』が上映され、そのあとの解説としてこの論文は読み上げられた。この精神分析と映画の連続講演は、モントルイユの青年と市民の教育に関わる市民公共団体 Maison Populaire によって企画された。このような連続講演には哲学と映画に関わるものもあり、フランスでは日常的にこうしたプログラムが組まれている。

### 2. 論文内容について

パトリック・マガラアの原作(『スパイダー』早川 epi 文庫から邦訳あり)とは異なり、デヴィッド・クローネンバーグの映画版では、主人公の一人称の語りがほぼ完全に排除され、主人公の内面が完全に閉ざされた世界が描き出されている。その近づ

きがたさは実際の精神病の主体への近寄りがたさをうまく映像化している。

モレル氏の主張によれば、スパイダーの過去の想起法は、実際の統合失調症患者の想起の仕方からかけ離れているのであるが、幻覚・妄想を蒙った主体が（自分でも意識せずに）過去を書き換え、それを現実だと錯覚していく過程は通常ほぼ経験不可能であり、才能ある芸術家が虚構によってのみ明みにだす精神病の真理があると思われる。

過去の回想のなかに妄想が「自然に」編み込まれるのをみれば、幻覚の支配下にある統合失聴者が何の面識もない他者に危害・暴力を加えるのも全く理解不可能ではなくなる。こうした「行為への移行」は実感可能な経験として認めがたいが、『スパイダー』という作品のおかげで、妄想には独自の論理に従って張り巡らされた知のネットワーク網目が存在し、そこに犠牲者が絡み取られることもあるのは理解できよう。

### 3. さらなる論文理解のために

社会においては殺人に代表される過剰な破壊欲動は禁止され、個人のうちでは近親相姦に代表される過剰な性的欲動は抑圧される。個人レベルであれ集団レベルであれ、抑圧もしくは禁止を生み出す原理は広義の意味で「法」とよばれるが、この法が各主体の身体に書き込まれることによって、性もしくは死の欲動に制限が課される。法による制限とは、法による欲動の機能停止ではなく、法という枠を与えることで欲動の享楽を意味の領野の下に滑り込ませることを意味する。また法とは、生、性、死という生物学的事実にも人間の経験に限界を刻みつける出来事として象徴的意味を賦与するものである。その法の起源に据えられるのが精神分析においては父親の権威であり、そのうちで最も純粋な形式をラカンは「父-の-名」のシニフィアンと命名した。

この父-の-名のシニフィアンがなんらかのかたちで排除されていると、日常生活の基盤となる抑圧の機制が現実のなかで機能しなくなると考えられている。『スパイダー』の世界のように、周囲の環境から日常的な親しみやすさが消え去り、身体からガスが漏れるなど異常な身体感覚が現われ、ともに生活する他者は何を考えているのかわからないオートマトンのように見え、他者ばかりか自分自身も分裂していく。『スパイダー』には記述されなかったが、最悪の場合には、世界滅亡が訪れるなどの幻覚・妄想も生じてくる。比喩的な言い方にはなるが、父-の-名のシニフィアンがあるべき場所に穿たれた孔から、本来であれば抑圧されているべき欲動が生々しく噴出し、不安を引き起こしたり幻覚を生み出す対象として立ち現われる。別言すれば、象徴的な場から排除されたものが現実世界に回帰するのである。

抑圧 *refoulement* の機制では、父-の-名が主体のうちに書き込まれていることを前提としているが、排除 *forclusion* の機制では、父-の-名がそもそも主体のうちに書き込まれなかった事態を指している。これは直接観察可能なものではなく、複数の徴候を確認することで事後的に想定される説明原理と捉えた方がよい。『スパイダー』のなかで父-の-名の排除の想定を許す要素をいくつかあげてみよう。

1) クレイグという父親の名ではなく、スパイダーという婚前の母親の名によって主人公の存在が規定されていること。名前という極めて象徴的な機能を果たすものが退けられ、それに代補するものが現われているが、父-の-名に取って代わる「母-の-名」というシニフィアンは存在しないのである。スパイダーという名は単なる綽名ではなく、父-の-名の排除を補填する妄想的シニフィアンであると見なすことができる。

2) 楔形文字のような判読不可能な私的言語を縦横斜めに綴っていること。ひとつの方向性に秩序立って記される言語の基本規則から外れており、言語というひとつの象徴的秩序のアノマリーを見出すことができる。こうした過去の回想を綴ることは、スパイダーの症状の安定に繋がることはなく、永遠に繰り返される殺害のシナリオの再現にしかない。幾度となく蜘蛛の巣を手で壊しても、また同じような蜘蛛の巣が張られるのと同様である。

3) スパイダーという名前は鏡の前で子供と母親によって口に出され、母子により命名行為として再認されていること。このシーンでは父親が登場しないどころか排除されており、いわば母子関係だけで閉じた「鏡像段階」が成立している。さらに、実際のスパイダーの父親は作品全体を通して存在感が非常に薄い。

この論文で扱われている〈女〉の問題もまた排除の機制に由来する事象である。男性の神経症者の対象選択では、父-の-名のシニフィアンが機能して、主体のなかに抑圧が生まれ、娼婦と聖母の対立図式が成立する。それはつまるところ、母親という原初的対象への性的欲動が抑圧されて、母親には優しい愛情だけが向けられ、抑圧された性的欲動は娼婦に向けられるということである。娼婦は実際にそうである必要はなく、要するに母親の聖性とは正反対の女性像であることが重要なのである。

こうして、母親は接近不可能な対象として例外の位置に退くと同時に、他の女性たちを潜在的なパートナーとして出現可能にさせるのである。つまり母親は潜在的なパートナーたちの共通分母のようにして存在することになる。これを言い換えれば、母親は直接的な性愛の対象として喪失されることで、主体にとっての欲望の象徴（もしくは象徴的ファルス）の位置に昇格するわけである。母親の代理となる配偶者を見つけたとしても、神経症者にとっては母親のときと同様の聖母と娼婦の分裂が反復さ

れる。配偶者に過剰に性的な素行を見出したときには嫌悪を抱いたり驚愕したりするが、それは母親＝聖母の系列に配偶者が組み入れられるからである。このように抑圧こそが神経症者の愛と欲望の前提条件となる。

ところが、スパイダーの場合のように、抑圧の機制の外部に位置する精神病の主体の場合、娼婦と聖母が完全に解離せず重合して〈女〉が存在することがある。しかも、この〈女〉とは妄想のなかの幻影、もしくは<sup>メカニズム</sup>運命の女として存在する。つまり、男性の幻想を完全に充足させる唯一の存在者でありながら、接近すれば不安を呼び覚まし、その警告を無視して近づこうとすれば、自らの生命によって代償を支払わなければならないような絶対的存在者である。現実の世界においては彼女と性的関係を持つことはできない。迫害妄想に悩まされたスパイダーが、現実世界で〈女〉を体現する女性を消せたとしても、この〈女〉は妄想世界で甦生して、新たな罫を仕掛けてスパイダーに自分を殺害させようとするだろう。こうした「終わらない物語」を貫く論理的循環もまた、父 - の - 名の排除の効果のひとつであろう。

もちろん、精神分析的な把握方法によって全てが明らかになるわけではない。たしかに、精神分析は認識論としても存在論としても整合性のある体系をなしていないかもしれない。しかし、それは同じ世界観を共有しない他者を危険視して排除してはならないという倫理的視座を提示していることは強調しておきたい。

(福田大輔)

(c) Geneviève Morel, «Spider, clone de la mère?», <http://www.oedipe.org/fr/spectacle/cinema/spider>.